



ダイヤモンドバックス傘下の1Aに在籍した2021年10月、アリゾナ州スコッツデールで行われた試合で力投(写真=Getty Images)

## 密かに抱いていた野望

NPBを経ずにアメリカへ。そのルートはアマチュア有望選手にとつて選択肢の一つになりつつある。直接渡米が現在よりさらに馴染みのなかった2018年にも、海を渡った投手がいた。当時パナソニックのE1スで、ドラフト1位候補にも挙がっていた吉川峻平だ。ただし、吉川の場合は逆風の中での挑戦だった。

現在は自らが得た経験を下に、後進の指導に勤しんでいる。

# 吉川峻平

「元ダイヤモンドバックス/投手」

目、ダイヤモンドバックスのスカウトからアローチを受ける。実は、最終的にアメリカで引退するという野望を、心の中に抱いていた。ほとんど誰にも話したことがなかった夢の実現、チャンスに胸は高鳴った。

「社会人からNPBに行ったら、アメリカに行けるのも30歳を越えたりしますし、それでしたらまだ、伸びしろを感じているうちにマイナーから上がってメジャー行けたほうが絶対、自分の人生的には面白いと思ったんです。NPBに行くと、アメリカに行けなくなるぐらいだったら、アメリカ行ってメジャーに上がれずに引退したほうがいい。どっちのルートも失敗したというふう

に板定して、どちらの後悔が少ないかを考えると、アメリカで失敗したと言うほうが、納得できそうだったので、そちらを選んだっていう感じです」

しかし、社会人野球を統括する日本野球連盟の所属選手は前年のドラフト終了から都市対抗終了までプロ球団と交渉できず、プロ球団と契約締結する場合は、締結日以前に退部し、登録抹消届を提出しなければならなかった。規約に抵触していることが発覚すると、侍ジャパン社会人代表の合宿に参加していた吉川はインドネシ

ア・ジャカルタ行き(アジア競技大会)の飛行機に乗ることなく、新幹線で帰阪。会社へ直行し、その場で退職届にサインした。

## 週6回はマクドナルド

幸か不幸か、野球を続けるにはアメリカに行くしか道がなくなった。18年9月、吉川は新人向けのキャンプに参加するため渡米した。合流したのはダイヤモンドバックス傘下1Aのバイセリア・ローハイド。メジャーを一軍とするならば四軍に相当する。カリフォルニア州は酪農地域で牛の臭いがきつく、年季の入った球場は、お世辞にも綺麗とは言えなかった。翌年、アメリカ最初のシーズンは右肘の違和感で開幕には出遅れたが、合流後はローテーションを飛ばすことなく完走。マイナー生活にも適応した。「ホームステイを球団が用意してくれていた。でも今考えると、すごい環境やったなと思いますね。9畳ぐらいの部屋に僕と通訳さん2人で、シングルベッド2つの離れ小屋で寝るみたいな。キヤリーケースも広げられないようなところで試合終わって寝るだけの生活だったので。それと、遠征先のマイナーの街は治安の悪いところが多いので、その辺は日本みたいに行動していたら、危ないことがあるんやろうなと思います。試合後、球場のご飯がまずくて、外で食べたいけど

## 社会人選手がマイナー契約

# 逆風の中でのチャレンジ

も、どこも聞いてない。週5とか週6でマクドナルドを食べていました」

このあたりはイメージどおりだった。しかしながら、想定外もあった。「スタッフが多くて、投げた後のケアは絶対にこれをやる、ウエート・トレーニングはこれをやるとか、ウオーミングアップはこれをやるみたいに、まずは教育される感じですかね。18歳のラテン系の子とか、俺が一番野球がうまいと思ってる奴が

いっぱいいるんですよ。そういう選手に全員、同じメニューをやらす。アメリカは各自に任せるイメージあると思うんですが、それができるのは、メジャーだけなんです。だからランニングも毎日、当たり前のようにやります。それは一番「なんでやねん」と思いましたね。「あるやん、ラン。アメリカは走らないんじゃないか？」みたいな……(苦笑)メジャーまでには3度昇格しなくてはならない下部組織ながら、レベルは「粗さの

ある社会人野球」。個々のポテンシャルは高く、能力を発揮できれば、上のレベルでも通用する選手がゴロゴロいた。

競争の激しい契約社会、チームメイトが突然、いなくなるという光景も目の当たりにした。「明日キャッチボールしようって言って、仲良くしてくれた奴が次の日、カバン持って出て行ったんで、うわ、これがアメリカかと」

4年目のシーズンを戦うはずだった22年3月下旬、それまで見送る側だった吉川にもその日はやってきた。「登板日やったんで、前日に「明日はこの回ね」と言われて「オッケー」と言って。そうしたら午前中に電話がかかってきました。クビが先発に変更か、どちらかなって思ってた……。電話をくれた人のテ



24年9月から大阪府堺市内で野球教室「GOAT」の代表として指導。技術よりもまず、座学を教えるのが方針だ(写真=小中翔太)

ンションで「あ、クビですか……」。と。覚悟というか、予感はしていましたね」

4月からは北米の独立リーグのシヤンパーグ・ブーマーズに所属したものの、右肘の状態は限界に近く、翌シーズン限りで現役引退した。

「2年しかプレーしてないのに、監督はすごい信頼を置いてくれて。チームに良くしてもらって、すごくいい思い出でした。野球人生、どうこうやったより、最後このチームで終わられて良かったなという思いのほうが強かったですね。やっぱり、アメリカを選んで良かったと思います。決断というか、経験したこと自体は本当に一つも後悔していません。むしろ良かったと思ってるので、幸せな野球人生を歩めたと思います」

### 頭を使った野球を伝授

帰国後の24年9月、大阪府堺市内で野球教室を開いた。技術指導もするが本当に得意なのはむしろ座学。決して速球派ではない右腕が生き残ってこられたから

は、頭を使った野球をしてきたから。投手としての心構えや、配球面につ

いての造詣が深い。「型にはめたくないんですよ。来た子に全部、同じことを教えるのは簡単なんですけど、それがその子に合っているか、判断するのが指導者だと思ってるので……。そのために、ボールを投げる時間よりも、話す時間が長くなるなら仕方ない。むしろそこに価値を見出しているからこそ、ずっと通って

出している子がいると思つてます」。直接渡米の選手が増えていく流れについてはこう言う。「良いなと思います(笑)。でも、心配になりますね。僕は代理人の方がいいだけと向こうに行つてサポートしてくれる人がいるか……」

生活面の大変さを痛感しているからこそ、野球以外の部分を気にかける。もし、アメリカ挑戦の覚悟を決めたスクール生がいれば「今までの伝手をすべて使つて、野球以外のアドバイスや、サポートを全力でやるう」と思います」。先駆者の一人として、協力は惜しまない。

PROFILE  
よしかわ・しゅんべい ●1995年1月24日生まれ。185cm75kg。右投右打。大阪府出身。佐竹竹小1年時に佐竹台ストロングアローで野球を始め、高野台中時代は千里山ボーイズでプレー。関大北陽高では2年時に内野手から投手に転向し、関大では4年時に大学日本代表でプレー。メジャー志向では入社1年目から主戦で活躍。2年目の2018年9月に渡米し、19年からはダイヤモンドバックス傘下1Aのバイセリア・ロー・ハイドでプレー。22年に北米の独立リーグのシヤンパーグ・ブーマーズに移籍し、23シーズン後に引退。24年9月から大阪府堺市内で野球教室「GOAT」の代表として指導する。現役時代のストレートの最速は152km/h。カットボール、スライダー、カーブ、シンカーを巧みに操った



## 「アメリカで失敗したと言うほうが、納得できそうだった」

は、頭を使った野球をしてきたから。投手としての心構えや、配球面につ